ベルーグ国トゥンベス川流域における若干の発掘

泉 靖一 寺田和夫

はじめに

中央アンデス地帯の考古学はある意味で非常によく整理されている。石期、古期、形成期、古典期、後古典期に大別される文化の発展は、放射性炭素法によって実年代もある程度検証され、ベルーの北・中・南部の海岸・山地では、地域ごとに文化の発展の連相が追求されてきた（WILLEY, 1958）。しかし、今までの知見には問題も多く、時代的にみれば、たとえば形成期の始まった正確な時代、場所、原因不明のままであるし、地域的にみれば、ベルーと北部アンデス地帯、ひいてはアンデス文化とメソアメリカ文化の鈴門をとく上で重要な鍵を握っているベルー最南部の文化に関しては、ごくわずかな、表面探検に基づくような概報が出されているにすぎない（PETERSEN, 1940, KELLY, 1958, GUZMÁN LADRÓN, 1958）。しかも、最近ではコロンビアのモミルその他（REICHEL-DOLMATOFF & REICHEL-DOLMATOFF, 1956), ベネズエラの各地（CHREXENT & ROUSE, 1959), エクアドルのパルディビアその他 (ESTRADA, 1956, 1957a, b, 1958, EVANS & MEGGERS, 1957, EVANS, MEGGERS & ESTRADA, 1959) の発掘によって、南米西部の初期の文化が急速に明るいに出てきた。アンデス史文化の中心地であるベルーにおける最南部地方の文化が知られればこれらとの連関関係がかなり明らかになるであろうと考えられる。

東京大学アンデス地帯学術調査団は 1958 年度第 1 次調査において、ベルー最北の都市トゥンベスの近くのガルバンサル（Garbanzal）遺跡で小発掘を試み、また近の諸遺跡で表面探検を行なった結果、この地方が、ベルーの今まで知られた最北の文化とは全く様相を異にする土器を出土し、それらの土器の分布範囲は相当に広く、BUSHNELLによって提案されたエクアドルのグァンガラ（ESTRADA, 1958, p. 14–16, 97）との類似がみられるように、北との類似が注目された。その絶対年代は、学術院大学古月部邦彦教授（東京大学アッデス地帯学術調査団 1958 年度報告書、p. 518–519）の放射性炭素の分析によれば B. P. 1740±70 と算出され、グヴァンガラについて ESTRADA（1958, p. 14–15）の想像している 3 世紀頃という年代を一致している。この年代にはアンデスの主要地域がすでに古典期に入っていたのであるが、われわれの発掘したガルバンサルでは、出土する土器が、刻文・生地模様彩色（negative painting）、塗色文（焼いた後の土色をぬる）、赤白模様（White on Red）など、ベルーの形成期後期のバレラス・カベルナス式土器で代表されるような法を用いていて、実際には年代が更に古いのか、あるいは形成期文化が、このベルー最北部地方で残存したかについての判断を、慎重にすべきことを教えた（前記報告書、p. 114–120）。層位学的に他の既知の文化との関係が知られれば前記に関してさえも断定的なことは言いにくいと考えられた。

前記調査団は 1960 度年、この問題を解決すべく隊員の一部である渡辺直經・寺田和夫 Lima の国立人類学・考古学博物館の C. Huapaya M.（人類班）、前川文夫（植物班）、佐

* 長谷部謙人博士喜寿記念論文

人間 ZZ LXVIII-4 増刊36-11 (40)
第1図 Pechiche 遺跡の全景

第2図 Garbanzal 出土土器
(Negative Painting)

第3図 Garbanzal 出土土器
厚手の高杯

第4図 Pechiche 出土土器
(41)
藤久・岩塚守公（地理省）からなる一行を派遣して再度ペルー最北の発掘を行った。前回の発掘を拡大してさらに土器の特徴を掴むこと、層位的関係の明瞭な遺跡を探すこと、放射性炭素の資料を充分に採集すること、ガルバンサル文化のペルーにおける分布を調べることが主要な目的であった。たまたま 1960 年にはペルー・エクアドル両国の関係が悪化して、国境地方近くにZarumilla川流域での調査は困難となり、分の問題の解決は不満足に終わったが、他の点ではおおむね満足すべき結果をえた。資料の日本への持ち出しは許可されたが、まだ到着していないので、現地で写した写真および 1958 年度の資料によって、この予報を記載する。

遺跡

ガルバンサルの遺跡は、トゥンベス（Tumbes）県、Tumbes川の東に接し、同名の市から約 9 km の場所にある。下位河岸段丘上にある墓地と、上位の段丘上にある 2 個の墳墓は 1958 年度の発掘の対象であった（前記報告書 p.114～120）。1960 年度は、上記の墓地に平行して別のトレプチ（2×12 m. F.）を入れて、一層多くの完形土器を発掘し、遺物の変異
を調べると同時に、川に沿ってこの墓地から溝を隔てて南側にある段丘にも若干の小茎掘（GII A, GII B, GII C, GII C2）を行って、集団的関係を求めてとった。その結果GII C2では、1958年の発掘でえたガルバンツル式の土器を含む淡褐色砂層の下に単色で刻文をもつ紛雑な土器群を含む黄色土層を認めたが、満足すべき結果はえられなかった。

そこで、ここから1 kmほど南方のペチチェ（Pechiche）遺跡と、さらに1 kmほど南方の町サン・ファン・デ・ラ・ビルヘン（San Juan de la Virgen）で、別のトレンチを掘ったが、とくに前者では興味のある遺物と、明瞭な層位関係によってガルバンツル文化よりも古い時代に属する文化の包含層をさぐりあげることができた。

Pechicheの遺跡はGarbanzalと同様にTumbes川の河岸段丘の西に傾いた斜面にある。雨期における浸水の水位の上昇にもかかわらず、浸水されることはないと。アルガロポの木が繁殖し遺跡の西に続いて川との間は耕地になっている。遺跡の東に、Tumbes市から南方に通ずる広い砂利道が段丘を切って走っている（第1図）。この段丘の表面に多数のガルバンツル式土器群の散乱している所をえらび、まずほぼ南方に長いトレンチA（1.2×7.0 m）、B（1.2×8.0 m）を入れたが、地表から70 cmのところに床面が発見されたので、この床面を追跡する意味で、A・Bに平行あるいは直角のトレンチを、他に4本入れた（第8図）。層位は上から数えて、床面までの上層、床面から下の淡黄色灰層の中層、その下の黄色粘土質層からなる基層に移行するまでの下層にほぼわけることができる（第9図）。床面は淡黄色の踏み固められた薄い層（1〜3 cm）で、2 個の殻跡を認めたことができた。その1つには床上に灰セメントのようにして固定した大きな厚いかめがあった。中層・下層を分かつつ青色粘土層以外は、褐色の砂層である。包含する土器群の量は上・中層できわめて多く、下層は部分的に少し塩基のあるが概して豊富である。なお柱穴や壁のような、住居であることを示す証拠はみつらなかったので、あらたに野外の調査場のようなものであったかもしれない。その上、床が非常に薄く、それでも、床面は中心部においてきわめてつつきにまっているが周辺部では不明瞭で輪郭を充分に確かめることはできなかった。
遺物

Garbanzal の墓地における出土遺物には、土器（第10図）、人骨、金屬製品（おそらく銅製の耳飾り・鼻輪・儀式用ナイフ＝トゥミ）・微小量の炭化した布片・人骨・貝・動物の骨などがあり、Pechiche からは土器のほかは遺物が乏しかった。両遺跡のすべての層で炭素を多量に採取することができたが、木製品や布は夏の高湿多雨のために保存状態がきわめて悪かった。資料がまだ十分にないので、ここでは土器の大略その特徴と、層位的な区別に従って記載する。

1. ガルバンザル式土器。ガルバンザルの墓地とペチシェの上層（中層も含むかもしれない）から出るものを総称してこう呼ぶことにする。この式の土器を出土した遺跡ではじめて記載された遺跡が Garbanzal だからである。細かい粘土に少量の雲母を混ぜて手でこねて作った皿、鉢、壷、高杯で、焼成は特記するもののほかは、中等度で、かなり多い。特記しない限り第4層に器形をみることができる。

①皿：円底と格底をもつものがある。前者には赤または白彩、時に両者を同時に用いて赤地白模様の場合があり磨研は行われず、とくに表面は粗雑な調整を行っている。そして、口縁部には波状口縁、頸部に刺突文をもつものもしばしば認められる。格底をもつ皿は、ネガティヴ・ベインティングー生地模様の場合と、暗赤・白・黒の多色の場合とあるーがみられ、時に囲んで、きわめて薄い皿（第2図）が作られる。

②鉢：焼成はとくに粗雑で日常の用に供したものらしい。たいてい定型で、突文のことが多いが、時に貼りつけた突起の上に刺突文をもつものがある。把手のある場合もある。

③無彩色壷：灰色で抹研の行われていない粗製の壷である。うすくもろい。

④彩色壷：赤地白模様または赤の胎土に赤色のスリップをかけて焼いたものである。器の内部から指で塗すことによって、外面に高浮き形の隆起ができている場合がある。

⑤高杯：ベルューではじめて報告された器形である。脚がいつもじっくり高く高杯では、足の外面に刻文を先の尖った器具できざみ、縦横の直線またはジグザグな線で幾何学的な文様を施し、時に刻文で囲まれた小方形に白の塗色を行っている場合があり、壁を貫いて小円孔を穿っている例も多い。このような高い脚をもつ土器では、入念な旋盤を施したものには小動物（トカゲであろう）の頭・手足をかたどった突起が脚の壁から突きだしていることがある。この脚の上に著る皿には、赤地白模様のもの、無文のものなどがあるが、よく研磨されている。口縁部は、水平なもの、外頸するもの、外側して舌状にたれたものなどがあるが、これは①でみた皿にもいえることで、両者は酷似している。また、低く、未焼がりに下方の径が大きくなった脚をもつつ高杯が小数発見された（第3図）。この山形の脚には、肩がかつつ装飾的役目をなしている。脚も皿も厚く固い焼きで無彩色である。皿の上面中央に鉛直に穴があけられおり、
第10図 Garbanzal 出土土器
皿の口縁部は丸味をおびて外観している。①の皿のなかのあるものは、この高杯の皿の上にぴったり重なる。

Pechiche 中層の土器は、ガルバンサル式とどのように違うか資料の正確な分析を行うまでは断定的なことを言えない。しかし赤地クリーム皿（第 4 園）は Garbanzal の墓地にも、Pechiche 上層にも発見されなかったものである。薄く、丸底で、すんだ赤地に、外壁では太い帯が連続的にクリーム色で描かれている。美しく磨研されていることと、ほぼ垂直な壁に、口縁と平行な太い窪みが外面につけられている点は、墓地のガルバンサル式にみられなかった特徴である。

2. Pechiche 下層。Pechiche 下層から出土した土器片は、ガルバンサル式としては、はっきりした差異を示す。① 鈴（第 5 園）。細かい砂を還元焼でやや黒色の鉱で、器壁は垂直、底部には器壁を延長して低い底があるので竹を輪切りにしたような形である。器面は内外ともよく磨研されていない。外面には、人面を模たおじにして、その縁にわたった顔の半分だけを表現したもののほか、土壇がふくれてあがって恐しい容貌をし、脂をむき出している。底部には赤色の顔料を塗色したあとがある。人物を描くには古い刻文と、貼りつけの技術を用いて装飾を示している。② コップ（第 6 園）。深いコップ状で、口縁部は軽く外観し、やや高い壁の大きい底がついている。褐色の胎土に、同色のスリップをかけて、何も混ぜていない。焼成は一様で、色にあがっているが、柔かくも高い。鈴ひさの先で、外面に立った人像または神像を描いている。③皿。白地で口縁部に黒の三角形を連続的に描いた、磨研のきわめてよい、固い燒成の土器も出土した。④器形はまだ掴みにくいが褐色の胎土を使い、やはり眼瞼のふくれあがった、しわのある人面で、眉間中央に突起（穴を穿つ）のある土器片が 2,3 出土した。

焼いてから塗色した目・眼瞼その他を残して磨研し、塗色のための顔料は、赤・白・黄を使っている（第 7 園）。

結　び

アメリカ高文化の核地域（Nuclear America）内の文化交流の問題は、さまざまな議論を呼んでいるが（Willey, 1955）、いまだに中央アンデスとメソアメリカの間地帯の研究が遅れていて、はっきりした話を掘りにいたっていない。しかし、最近ではクアタメラとエクアドルの間の関係が指摘され（Coe, 1960）、中層アンデス地帯とその北部との関係を研究する必要に迫られている。東京大学アムステルダム土器先端研究や 1958 年、ペルー北部の Tumbees 市の近くに Garbanzal の良好な遺跡をみつけ、多くの円形土器を発見した。その特徴にはペルー考古学にとって形成期後の技法が幾つかみられたが、洗錬された器形、多様な器種から考えてあろう、もとと後れえた時代かもしれないに想像された。放射性炭素法による年代は 1740 年を示し、中央アンデスの既知の文化では古典期に相当する時期であった。またこのなかにみられる高杯はエクアドルの Guanagala と類似し、これが約 3 世紀を想像されているのと一致する。1960 年代には、このガルバンサル式土器の層位の関係を掘るため、再び Garbanzal 付近で発掘を行ったが、とくに Pechiche で良好な層位に遭遇することことができた。すなわち Pechiche 上層からガルバンサル式の土器片が出土し、下層には、太い凹線で人像を描いたコップや、厚肉で人面の半分を描いた黑色の還元土器など、今までのペルーにしかみられない多くの土器が出土した。黑色土器の立人像とペルーの Sechin（Tello, 1956）の石像との関係、エクアドルやクアタメラの形成期後期にみられる紅色土器
ベリ－国トゥンベス川流域における若干の発掘

(iridescent) のベリ－における存否などは、今回の試料によって確めるべき興味ある問題である。いずれにしても Tumbe は、ベリ－の今までの考古学では知られなかった貴重なデータを供給し、エクアドルとの親近性によって、北方との関係を解く上に、重要な寄与を興えるであろう。

（東京大学教養学部文化人類学研究室）

文 献


Excavations in the valley of Tumbes, Peru

SEIICHI IZUMI and KAZUO TERADA

The University of Tokyo Scientific Expedition to the Andes was sent to South America in 1958 to carry out a general survey in Peru and Bolivia. Small scale excavations at Garbanzal near Tumbes City turned out to be very interesting. Many objects, dishes, bowls, goblets and jars so far unknown to the Peruvian archaeology, which suggest the relationship with those of the northern Andes, were discovered, and a goblet with a high leg has an evident similarity with that of Guangala, Ecuador. Carbon analysis applied to the fragmentary wood revealed the date to be 1740 B. P. ± 70, which is consistent with the date of Guangala estimated by Estrada (1958). We published the results obtained in Andes, the Report of the University of Tokyo Scientific Expedition to the Andes in 1958.

A group of our Second Expedition in 1960 digged new pits at Garbanzal and also at Pechiche nearby to examine the stratigraphic context of the Garbanzal culture. Archeological sites of Pechiche showed good stratigraphy, the excavation of which confirmed us the existence of something like a dwelling bed at a depth of 70 centimeters, a stratum of yellow clay lower than 180 centimeters well discriminative from the upper layer, and a virgin soil. Vessel shards of Garbanzal type (Fig. 2, 3, 10) were unearthed from the layer above the 180 centimeter level, while the lower layer yielded different and more artistic types of ceramics: a black bowl with anthropomorphic face representing a left half of it, a brown vessel with an annular base and broad incisions of standing human figure, and a shard with corrugated face which has a round protuberance with a hole in the center at the glabella, etc. (Fig. 5, 6, 7). Some of them are painted after baking and have high relieves with deep incisions. These characteristics may suggest correspondence of the culture of lower layer at Pechiche to that of middle or late formative period in the Andes. The absolute date of the material will be reported in near future by the analysis of carbon which was collected abundantly.

Institute of Cultural Anthropology
Faculty of General Education, University of Tokyo
Tokyo, Japan